

【一般演題1】 第3席 「意斎流腹診術に関する一考察—『診病奇核』中の引用文よりー」

京都 宿野 孝

「腹を按する」という素朴な医療行為が、何時からことのほか重要視されるようになったかは定かでないが、平安末期には“腹とりの女”と称される按腹を業とするものが存在していたらしい。『按腹図解』。その後、室町末～織豊期に至って、このような按腹の延長線上に、当時の医家達の手によって鍼灸・湯液のための腹診が開発されたと考えられる。腹診が最も発展を遂げたのは江戸期においてであり、当初は鍼術のための腹診が発展して主流となり、次第に湯液のための腹診（腹證と処方が相対する）の研究が進み、やがて腹診の最盛期を迎えるのである。

このうち意斎流という最初期の一派の腹診は、御園意斎（1557-1616：幕末の考証医家・森立之[森家七代]の家系を示す文書では、松岡娃だが、一般に同一人物とされる）が、森家初代・森道和と二代・森仲和の二人に伝えた鍼術（打鍼）に伴うものである。意斎流の全容は、四代・森中虚の『意仲玄奥』（1696）に集大成されていた（自筆稿本を故大塚敬節氏が所蔵していたが、現在は所在不明）。御園意斎は、夢分斎（詳細不明）から打鍼術を学び多数の門人にその術を広めたので、打鍼術中興の祖とみなされている。この意斎流と別系とみなせる夢分流は、奥田意伯による伝書『鍼道秘訣集』（1685）が当時かなり流布したようで、本書を介した御園意斎の腹診（打鍼術）は広く普及したものと考えられる。そして現在においても夢分流の知名度は意斎流を遥かにしのぎ、夢分流という一つのあり方を御園意斎の腹診（打鍼術）の総体と同一視するほどである。

よって本演題では、現在まであまり注目されていなかった意斎流腹診術を研究対象とする。そこでまず意斎流の周辺事情を明らかにする。そして幸いにも『意仲玄奥』の内容を「中虚曰」として引用している多紀元堅の『診病奇核』（森立之の引く経文を増補した石原本）から該当経文を抜粋して検討し、御園意斎を鼻祖とする一流派の腹診術が如何になるものであるかを明確にする。それによって織豊～江戸期における腹診形成期の全体像をより正しく把握し、今後我々が腹診を研究する上の一助としたい。